



Title	GLOCOLブックレット07 本巻の構成について
Author(s)	松野, 明久
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 7, p. 5-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48388
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

本巻の構成について

松野明久 大阪大学大学院国際公共政策研究科

フード・セキュリティ（食料安全保障）は紛争とどう関係しているのであろうか。フード・セキュリティの悪化が紛争を引き起こしたりするのであろうか。それとも紛争という状況こそがフード・セキュリティの不安定化の原因となっているのであろうか。

こうした問いかけから、大阪大学グローバルコラボレーションセンターの研究プロジェクト「フード・セキュリティの文化人類学的研究」（科研基盤A：代表者 栗本英世）の一環として2010年12月4日、「フード・セキュリティと紛争」と題するワークショップを開催した。このブックレットはそのワークショップでの発表・討議をもとに書かれた報告を集めたものである。

テーマの性格上、執筆者は文化人類学のみならず、国際政治学、経済学、国際協力学、ジェンダー学など多様な分野から集まっている。また、考察の対象もグローバルな視野で気候変動と安全保障を結びつける環境安全保障の理論から、フランス、東アフリカ、パレスチナ、ナガランド（インド北東部）、チッタゴン丘陵（バングラデシュ）、東ティモールなどフィールドの事例検証に及んでいる。これらの地域は、フランスを除けばいわゆる紛争地であって、東ティモール以外ではまだ紛争は終わっていない。

ワークショップは、フード・セキュリティと紛争の関係を世界的視野でかつ体系的に整理するというのではなくて、それぞれが持ち場でつちかってきた問題意識や知見を出し合ってテーマに対する一定の展望を得ようという趣旨で行ったものである。したがって、アプローチも対象地域もそれぞれである。しかしながら、これらの一見異なる発表の中から、問題の輪郭がおぼろげながら現れてきたように思う。

まず、蓮井氏は、環境安全保障をめぐる国際的な議論の現状を整理し、フード・セキュリティをそれだけで論じることがいかに狭い議論であるかを示している。気候変動に加え、水、土地、

海洋、エネルギー資源など限りある環境をめぐる諸問題を包括的に論じる必要がある。

次に、中川氏は、農業近代化が達成されたフランスでこれまで追求されてきた生産至上主義の農業に対して生き方も含意した「農民的農業」のモデルを提示する新たな農民運動が生まれていることを紹介し、グローバリゼーションがもたらすコンフリクトがフード・セキュリティの質への問い合わせを導いている、そうした新たなモデルに向けた実践がマクドナルド解体事件といった反グローバリズムの直接行動となっていると論じる。

さて、気候変動、資源の希少化、グローバリゼーションが食料生産の安定性を損ねている、または食料生産の質を問うコンフリクトを生み出しているとすれば、以下のフィールドからの報告は紛争がフード・セキュリティのあり方を歪めているさまを浮き彫りにしている。

湖中氏は、東アフリカの事例を紹介しつつ、アフリカの紛争が一般的にフード・セキュリティの悪化がその原因であるかのように言われている中で、事実は逆であると論じる。政治家の野望が紛争を引き起こし、それがフード・セキュリティを悪化させているのである。

また、清末氏が論じる占領下にあるパレスチナのヨルダン渓谷の状況は、政治的に抑圧された農業生産の最たる例であろう。そうでなければ実り豊かな土地が、イスラエルによる土地の収用、プランテーション農業の導入、農民の農園労働者への没落、自作農の川・井戸(農業用水)へのアクセス制限、輸出の管理・制限などによって悲惨な状況に追い込まれている。

パレスチナほど知られていい知らないかもしれないが、下澤氏が紹介するバングラデシュ・チッタゴン丘陵地帯のジュマの人たちの状況、木村氏が紹介するインド北東部アッサム地方の状況も、政策的移民の流入、近代的農業生産の導入、市場経済の浸透によって先住民族が土地や森林を喪失し、周縁化されている過程を示してあまりある。先住民の周縁化が食料増産の名の下に行われてきたのを皮肉と言わないで何と言おうか。

古沢氏と私が描いている東ティモールの状況はことなる断面を切り取ってはいるが、東ティモールがおかれたポスト・コロニアルな食料生産・消費の状況を示しているという点で共通している。ポルトガル植民地支配、インドネシア占領支配、そして国連暫定

行政を経て独立を果たした東ティモールであるが、それぞれの時代の農業政策・食料政策の遺産を引き継いで今日にいたっているのである。統治する側の論理・都合によって安定的食料生産は翻弄され続けてきたと言える。

以上、今回のワークショップの成果から、フード・セキュリティと紛争の関係を考えるときには、調達されるものとしての食料の安定供給ではなく、むしろ土地と水の基礎の上に食料を生み出す農業の安定性、そして農業を営む人間の生活の安定性という視点が重要であることが明らかになったように思う。それらの安定性を損なうものが気候変動であり、グローバリゼーションであり、占領、抑圧、周縁化なのである。考えてみれば、気候変動と人間の営みの結果に他ならない。そういう意味ではフード・セキュリティの問題とは、人間社会のあり方の問題であり、暴力と不正義の問題であると言える。